

KITTA ニュース



CONTENTS

理事長あいさつ	P2
2025年度実績と2026年度計画	P2
2025年度の研修実績	P4
国際研修事業の実績	P6

研修部トピックス	P7
技術協力部トピックス	P11
KME活動紹介	P12
退任あいさつ&人事異動	P12

2025年は、と言うか2025年も新型コロナによるパンデミック以来続くなんとなくモヤモヤとした世界の雰囲気を感じる一年であった。この数年間、海外における紛争に歯止めがかからないことになってきていることに不安を感じる人も多いと思う。コロナや国内で頻発する地震や豪雨などの自然災害により多くの被災者が出ているが、これらはある意味人知を越えたものでやむを得ないものであると言えるが、海外での紛争は明確に人災、それも国のリーダーが火種を作っているのだから始末に悪い。

数多くの国からはるばる日本で学ぶために来られる研修員の受入れが主たる業務であるKITAにとっても、このような海外の情勢には大なり小なり影響を受けることになる。ウクライナやパレスチナのように、紛争当事国や地域から来られる研修員の気持ちを考えればやるせないものがあるし、紛争地が拡大することによって、移動の航空機の経路も変更を余儀なくされ



北九州国際技術協力協会
理事長 山本 郁也

ることにもなり、リスクも増しつつある。しかし、最近ではAIの進歩によって安全な移動ルート of の最適解も一瞬で得られる時代になってきているようで心強い。

AIと言えば、私の会社生活の間にも何回かのブームがあり、工場現場への応用を考えたこともあったが、残念ながら実用化の壁は高いものだった。しかし、今回はかなり様相が異なるようだ。普段お付き合い？することの多い検索AIでも、20語程度の質問で原稿用紙1枚分くらいのご丁寧な回答がいただける。また言語の翻訳機能の進歩にも目覚ましいものがある。文章ならGoogle翻訳を使えば240以上の言語に対応できるらしいが、KITAの仕事においても、海外を相手にする以上外国語の翻訳は頻繁に発生するので、大いに活用させてもらっている。そして今最も注目しているのがAI同時通訳機能だ。KITAの研修では主に英語が使われるが、研修員が皆英語堪能と言うわけでもなく、もし研修に同時通訳機能が上手く活用できれば、より充実した研修成果を持って母国に帰ってもらえることになるかもしれない。ひいてはネイティブスピーカーが1億人程度しかいない日本語を使うわが国にとって大きなハンディ解消のチャンスにならないかと夢想する。

その余りに急速な進歩に恐れを抱いて各種の制限が検討されているAIであるが、毒薬と良薬は紙一重でもあるのは間違いなく、将来人間同士が戦うことがなくなるAI技術をAI自身に実現してもらいたいものである。欲にまみれた現世の人間には無理そうなので!!

2025年度実績と2026年度計画

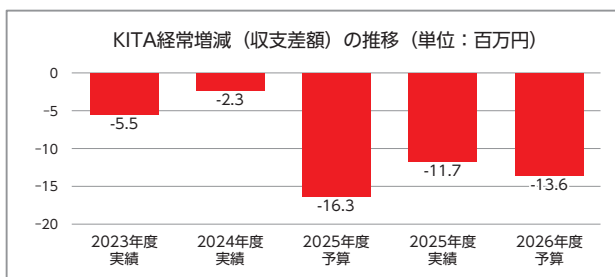
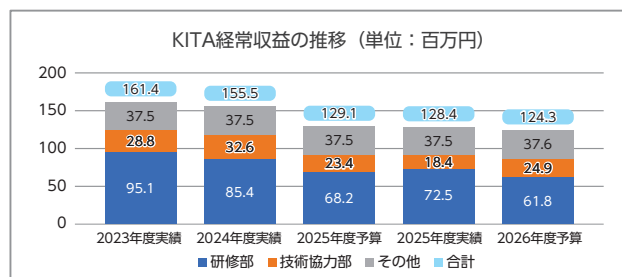
事務局

事務局長 小田原 博

2025年度の研修事業は予算通り19コース（対前年比4コース減）を実施し、業務管理比率の増、業務人件費の単価アップもあり経常収益は対予算4.3百万円増の72.5百万円、技術協力事業はベトナム工業団地事業の規模縮小等により対予算5百万円減の18.4百万円。その結果、KITAの経常収益は対予算0.7百万円減の128.4百万円となりました。KITAの経常増減は研修事業の役員のコースリーダー兼務、部門費の削減もあり、対予算4.7

百万円改善し、11.7百万円の赤字にとどまりました。

2026年度研修事業の予算はコース数が減少し17コース、経常収益は対実績10.7百万円減の61.8百万円、技術協力事業の経常収益はフィリピン、ベトナム関連新規事業もあり実績比6.5百万円増の24.9百万円、KITAの経常収益は実績比4.2百万円減の124.3百万円となりました。また経常増減は実績比2百万円悪化の13.6百万円となり、引き続き厳しい予算となりました。

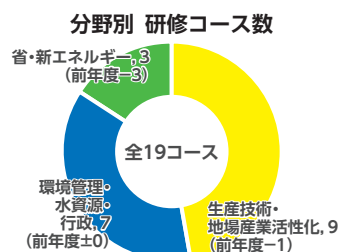
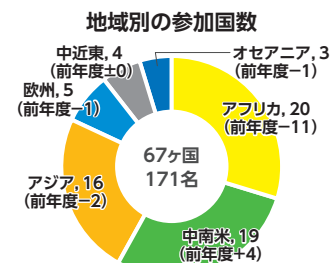


研 修 部

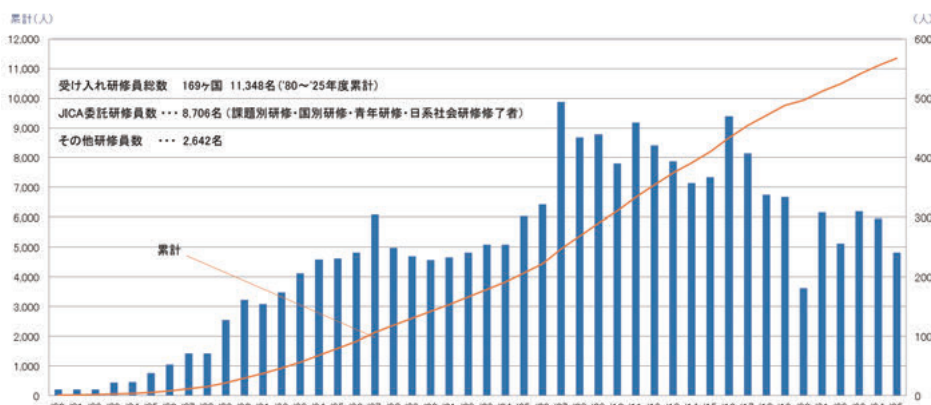
研修部長 森 永 郁

2025年度も多くのJICA海外研修事業を実施し、地域別には、アフリカ20ヶ国、中南米19ヶ国、アジア16ヶ国など、世界67ヶ国から171名の研修員を受け入れた。

【2025年度研修員受入れ実績】

研修員受入れ状況推移
(2026年3月31日)

2025年度の研修実施実績を含めて、受け入れ研修員総数は、169ヶ国 11,348名となった。



技術協力部

技術協力部長 青 柳 祐治

2025年度は、KITAが事業実施団体となる案件がなく、厳しい状況が続きました。

特に技術協力事業において、現地事情により当初計画より現地活動日数が減少し、収益面でのマイナス要因となりました。

2026年度は、各分野で事業規模を広げていく予定です。

●今年度取組予定
「技術協力・指導」案件の事例

「ダバオ市全域を対象とした一般廃棄物のコンポスト・リサイクルシステム構築プロジェクト」



標記プロジェクトの一環として、上記のケージを全市的に60個展開し、資源化物のリサイクルを推進する

技術協力事業は、フィリピン・ダバオ市における協力事業が、JICA草の根事業に採択されるなどの新規案件が予定されています。

北九州メンテナンス研究会では、会員企業の拡大などを通じて受講者を増加させ、安定的な運営を図っていきます。

コンサルティング事業では、フィリピン・ダバオ市廃棄物発電整備計画が再開されるなど、昨年度より業務量が増加するものと期待されます。

今年度も「市内に蓄積された技術・ノウハウを生かした海外技術協力、及び市内企業の海外事業展開支援」を基本方針として業務を進めていく予定です。

区分	2026年度実施予定案件
研修・セミナー	北九州メンテナンス技術研究会活動 (技術セミナー開催)
	環境省環境調査研修所研修 (廃棄物・リサイクル専攻別研修、国際環境協力基本研修)
技術協力・指導	ダバオ市全域を対象とした一般廃棄物のコンポスト・リサイクルシステム構築プロジェクト (JICA草の根技術協力事業)
	ベトナム国ハイフォン市における住民参加による地域特性に応じた分散型廃棄物管理モデル構築事業 (一財) 自治体国際化協会:自治体国際協力促進事業 (モデル事業)
コンサルティング	フィリピン・ダバオ市廃棄物発電整備計画 (対フィリピンODA) 【専門技術者派遣】
	ベトナム・バリアンタウ省環境配慮型及びIT活用型モデル工業団地管理経営能力向上プロジェクト (JICA技術協力プロジェクト) 【専門技術者派遣】
	バングラデシュ国南アジアごみ減量化及び持続可能な社会構築プロジェクト・大気管理能力向上プロジェクト (JICA技術協力プロジェクト) 【専門技術者派遣】

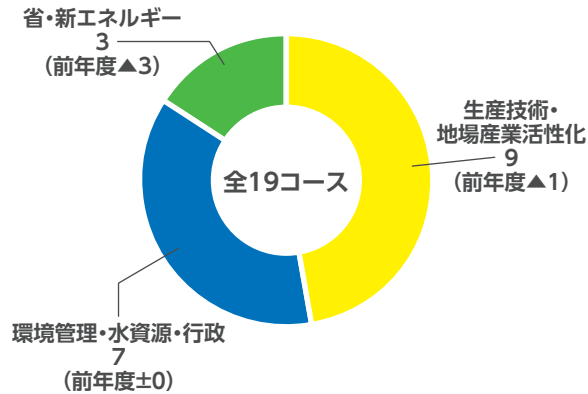
2025年度 JICA研修コース実績一覧

No.	コース名	区分	参加 国数	研修 員数	コース リーダー	2025年												2026年		
						4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
Ⅰ 環境管理・水資源・行政分野																				
1	リサイクル推進による循環型社会構築に向けた廃棄物の適正処理技術	課題別	11	13	指輪 勤															
2	水環境行政 (水質汚濁防止、廃水処理、水源保全)	課題別	8	11	緒方信一															
3	地域の水問題を解決する実践的統合水資源管理	課題別	11	13	緒方信一															
4	アフリカ地域 村落給水衛生管理(B)	課題別	7	8	窪田琢也															
5	食品安全行政	課題別	6	8	山下幸介															
6	持続的な都市開発のための都市経営(A)	課題別	9	10	八田正樹															
7	持続的な都市開発のための都市経営(B) (西語)	課題別	6	7	八田正樹															
Ⅱ 生産技術・地場産業活性化分野																				
1	産業クラスター・アプローチによる 地域産業振興(A)	課題別	4	5	森岡達弥															
2	グローバル市場における輸出振興／ マーケティング戦略(C)(西語)	課題別	5	6	窪田琢也															
3	品質・生産性向上(ベーシック・カイゼン)(A)	課題別	10	10	鳥飼久敏															
4	産業界の要望に応える電気電子分野人材の 育成	課題別	9	10	古賀義啓															
5	地方都市におけるスタートアップ・ エコシステム構築発展(A)	課題別	8	8	肥田 敦															
6	地方都市におけるスタートアップ・ エコシステム構築発展(B)	課題別	4	7	森岡達弥															
7	DX推進による産業振興／ビジネス革新	課題別	8	9	鳥飼久敏															
8	日本的モノづくり技術	日系研修	4	5	古賀義啓															
9	和食ビジネス振興(西語)	日系研修	5	6	中村 博															
Ⅲ 省・新エネルギー分野																				
1	エネルギーの高効率利用と省エネの推進	課題別	9	11	森永 郁															
2	脱炭素化に向けた水素利用(A)	課題別	9	11	俵 洋一															
3	青年研修 再生可能エネルギー(C)	青年研修	8	13	宮内 正															

- ・研修期間中の使用言語は基本的に英語ですが、それ以外の場合はコース名の後に括弧書きで示された通りです。
- ・全19コースは全て来日研修で、63%に相当する12コースが下半期に実施されました。
- ・全19コースの区分内訳は、課題別研修16コース、日系社会研修2コース、青年研修1コース

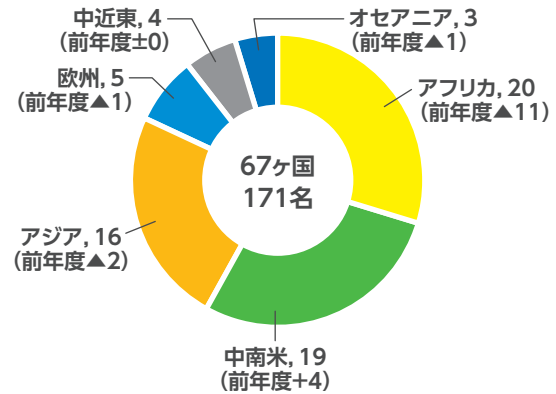
< 2025年度 分野別、参加地域別のJICA受入れ研修員統計データ >

2025年度 研修コース数実績



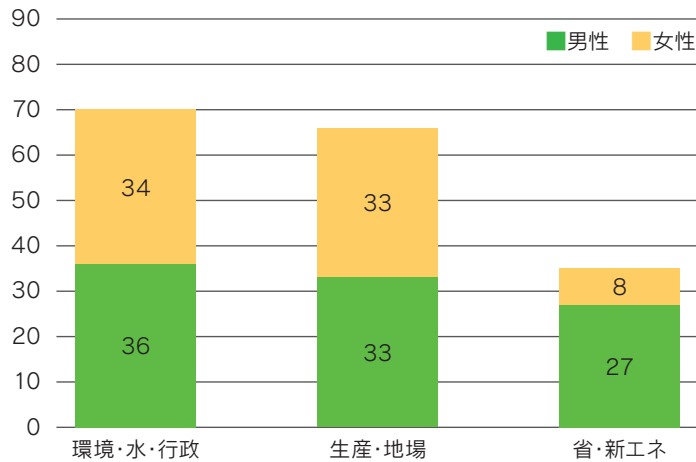
生産技術・地場産業活性化分野と環境管理・水資源・行政分野については、前年度から大きな変化はありませんが、省・新エネルギー分野のコースが前年度から半減する結果となりました。

2025年度 世界地域別の参加国数



アフリカ、中南米、アジアを中心に世界67ヶ国から171名の研修員が参加しました。参加国数は、前年度から11ヶ国減少しましたが、これはアフリカからの参加国が前年度の31ヶ国から20ヶ国に減少したことが最大の理由です。

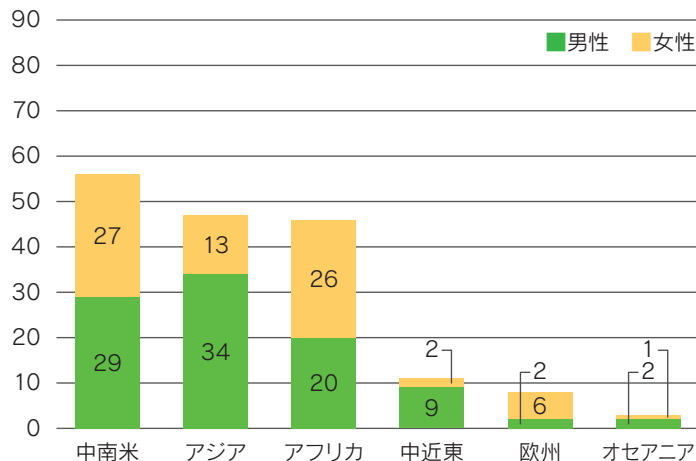
2025年度 研修分野別の研修員数



生産技術・地場産業活性化分野と環境管理・水資源・行政分野においては、前年度とほぼ同数の研修員数ですが、男女比率がほぼ半々となったことが今年度の大きな特徴です。

省・新エネルギー分野では、研修コース数が前年度から半減したことにより、研修員数もおおよそ半減しました。

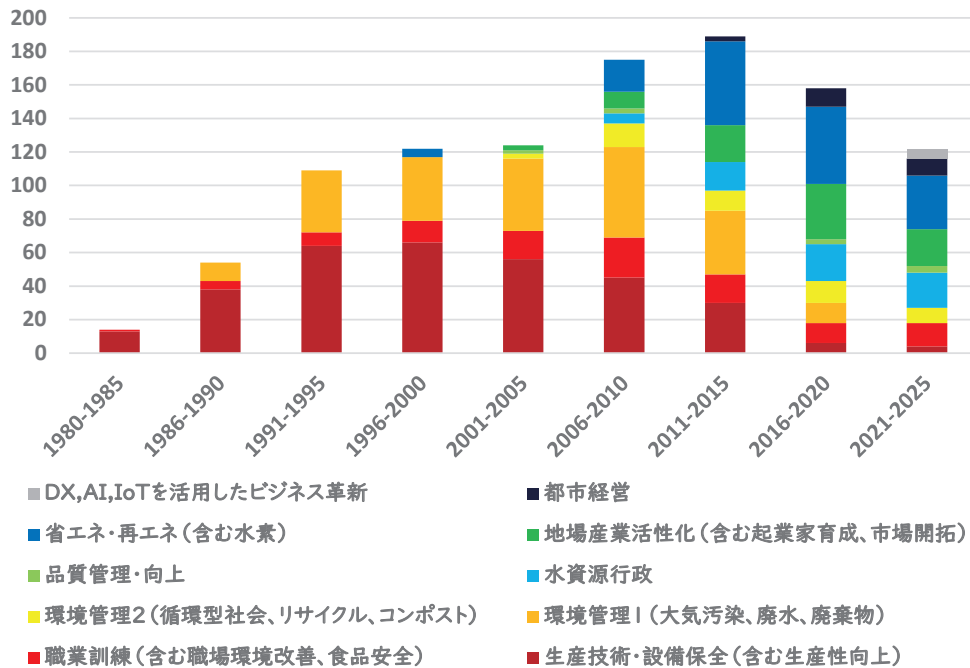
2025年度 世界地域別の研修員数



例年、アジアやアフリカからの研修員が最多となっておりましたが、2025年度は、単年度としては初めて中南米からの研修員が最多となりました。

また、アフリカからの研修員は、男女比率で逆転（女性＞男性）が発生しました。

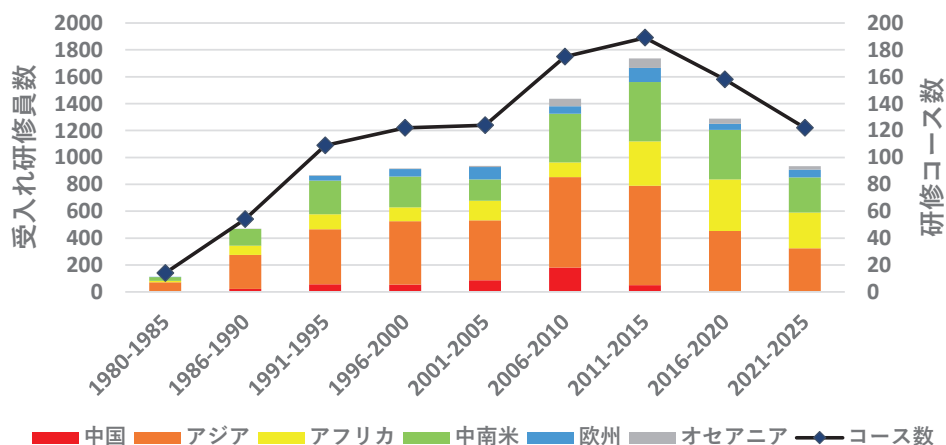
<KITA設立後 年代毎の分野別コース数の推移> (JICA受入れ研修)



<1980年KITA設立以降の主な流れ>

- ・1990年頃までは、生産技術・設備保全に関するテーマが主流
- ・1990年以降は、環境汚染対策（大気汚染、廃水、廃棄物など）をテーマにしたコースが急増
その後、徐々に循環型社会、3Rをテーマにしたコースへシフト
- ・2010年頃から省エネや再エネをテーマにした研修が増加
更に、地場産業活性化、水資源行政をテーマにした研修が増加
- ・2010年代後半よりJICA殿の方針変更やコロナパンデミックの影響などによりコース数減少
- ・2020年以降はAI、DX、水素などをテーマにした研修が開始

<KITA設立後 年代毎の地域別受入れ研修員数とコース数の推移> (JICA受入れ研修)



- ・2010年代前半に受入れコース数、研修員共に最多となりましたが、その後 コロナパンデミックの影響などもあり大きく減少傾向です。
- ・2010年頃まではアジア地域からの研修員が過半数を占めておりましたが、徐々にアフリカや中南米からの研修員比率が高くなり、直近ではアジア、アフリカ、中南米から研修員数が概ね平準化されております。
- ・中国からの研修員は主に環境汚染対策をテーマにしたコースで2008年をピークに受入れ、その後大幅に減少し2019年が最後となりました。

脱炭素を目指して

研修コース名: エネルギーの効率利用と省エネの推進

研修期間: 2025年9月5日～10月10日

コースリーダー 森永 郁

中米(ドミニカ共和国、エクアドル、ホンジュラス)、アフリカ(エジプト、ケニア)、東南アジア(カンボジア、パキスタン、ラオス)、中東(パレスチナ自治区)の政府機関、電力会社及び大学から11名の研修員が来日し、32日間の日程で、行政機関、大学、民間企業の講師の皆様から日本の省エネ政策、技術、活動事例を学びました。

研修はJICA九州センターとJICA東京センターで、各分野の専門家の皆様によるエネルギーの理論や省エネ技術に関する講義に加えて、北九州の産業発展と公害克服の歴史、リサイクル社会の実現、省エネルギーと風力発電や水素エネルギー活用などの状況を視察しました。更に加古川市、大阪市、東京都、福岡市、鹿児島市などを訪問し、省エネ設備、省エネ活動、ZEBやZEH、地域熱供給のビジネスなどの事例について丁寧な説明を受けながら施設の見学をする事が出来ました。

各研修員は、自国のエネルギー需給の実情を踏まえた上で、研修で得た知識を自国の省エネの推進にどのように活かして実行するか、具体的なタイムスケジュールを含めて提案書として整理し、最後の発表会で自信をもったプレゼンテーションを行いました。JICA本部の各国担当の皆様から貴重なご意見と高い評価をいただき意義深い発表会となりました。

来日当初、研修員の皆さんは少しぎこちない様子でしたが、講義での活発な質問や意見交換、講師の皆様への感謝の意を表するにつれて、ジョーク大好きなA君、「ハイハイハイ!」の掛け声で締めるMさんなど…皆さん

急速に自分本来の姿を出せるようになりました。京都の研修旅行では伏見稲荷と二条城で日本文化に触れ、浅草とお台場では江戸と東京を満喫し、北九州に帰った後は本当に仲の良い “We are one team!” となりました。

最後のお別れパーティーでは、皆さん涙で肩を抱き合って…、それぞれ自国に戻っていきました。日本で学んだ事を自分のプランとして実現するには多くの困難があるでしょうが、皆さんは必ず出来ると信じております。日本が大好きになった研修員の皆さん、今後も連絡を取り合って、生涯の絆としてくれる事を心より祈っています。



CHAdemo協議会訪問

＝ 閉講式 研修員代表スピーチ ＝



■閉講式
2025年10月10日
■研修受入れ期間
2025/9/5～2025/10/10
■代表スピーチ
Mr. HERNANDEZ AMBATO Jorge Luis
(エクアドルより参加)

「エネルギーの効率利用と省エネの推進」コースの研修員全員を代表して、JICAとKITA及びコーディネートしていただいた皆様に、この充実したプログラムを通じて提供された貴重な支援と機会に深く感謝申し上げます。

出席いただいた山口次長のJICA九州、そしてJICA東京のご尽力に心から感謝申し上げます。講師、ファシリテーター、サポートスタッフの皆さん、専門知識や文化を共有し、多様な国からの研修員同志に強い協力の精神を育ててくださったことに特に感謝します。

特に、JICAオフィサーの小川さん、コーディネーターの原田さん、コースリーダーの森永さん、アドバイザーの

吉田さんには、コースを通して素晴らしい指導と調整、継続的な励ましをしてくださったことに感謝します。

私たちは、新しい技術ツールや視点を持って帰るだけでなく、エネルギー効率、持続可能性、国際協力における日本のリーダーシップに深い尊敬の念を抱いて母国に戻ります。ありがとうございました。



楽しい食事会

美味しい和食の再発見 ～新しい和食メニューの開発～

研修コース名: 日系社会研修 和食ビジネス振興

研修期間: 2025年11月18日～12月4日

コースリーダー 中村 博

本コースの研修員は、日系の6名(ブラジル2名、ボリビア1名、コロンビア1名、パラグアイ1名、ドミニカ共和国1名)で、主に日本食レストランの経営者、味噌等の素材の製造者、初めて参加する映像制作会社の社員でした。研修中の使用言語は本来 日本語のコースで6年前にスタートしたのですが、日系3世ともなると、日本語は理解できないため、今ではスペイン語やポルトガル語で研修しています。料理体験や実習では、短い会話に加えて実物があるため、スペイン語の通訳のみで、十分に伝わりましたが、講義ではスペイン語とポルトガル語の正規の翻訳資料でないと十分に理解ができません。そこで機械翻訳したスペイン語とポルトガル語のテキストを用意したのですが、翻訳精度には限界があり、かなり苦労しました。

コースでは、料理体験、実習を最大限に取り込みました。料理教室では、ちらし寿司、鯛の土瓶蒸し、出汁の作り方等を学びました。糀の原点、糀を使う料理の実習、更に巻き寿司や鮭を入れた和食の弁当作りも体験しました。糀屋本店では、講師のお孫さんでも作れる黄金比3:2:1の卵焼(卵3個、塩糀2さじ、砂糖1さじ)を教わり、受入側のコーディネーターとコースリーダーも記憶して、家庭で実践しています。

また、研修員の全員が、時間をかけて「そば打ち」の体験をしました。研修員からは「そばは美味しいと思った事がなかったが、このそばは今まで食べた中で最高に美味しい」との感想が聞こえてきました。体験後に全員がそばの乾麺を自国へのお土産として購入しました。

更に、大規模な味噌工場の視察、味噌仕込みの体験、酒造所の見学、抹茶の体験、多くの醤油製品の紹介など、さまざまな貴重な見学も出来ました。

特に、詳細に計画したのは、研修員の昼食の場所です。

来日したら、和食が食べたいとの要望が多いと予想して準備しましたが、予想通り「和食、和食、和食...」との希望でした。そこで、「佐伯道の駅まる」、「唐戸市場」、「宗像海鮮昼食」を準備しました。海鮮昼食では、「いかの活造りを刺身と天ぷらで2度味わえるのは素晴らしい」、「いかが可哀そうだけど美味しい」との感想でした。また、天ぷら定食のひとつのトレイに乗せられた「主菜・小鉢・茶碗蒸し・味噌汁の組み合わせ」に感心していました。

中南米では、韓国をはじめとするアジア諸国の料理が勢いを増し、日本食の人気は低迷しているそうです。日本食のレストランでは、日本食を作る担い手や従業員が、本来の日本食を食べた事もないし、経験もない人たちが多いそうです。

研修員は、今回の研修で、美味しい和食を再発見する事ができたようです。更に、料理実習では、糀の使い方、多くの出汁の作り方の知識を得る事ができました。帰国してから、研修員の皆さんが現地に適合した和食メニュー「手に入る食材を使い、自国の人が好み、手ごろな価格」を開発し、現地の人から好まれる、新たな「日本食の伝統」を築いてくれる事を期待しています。研修の成果を取り込んで、新たな和食作りに挑戦して下さい。



益元料理教室での実習

＝ 閉講式 研修員代表スピーチ ＝



■閉講式
2025年12月4日
■研修受入れ期間
2025/11/18～2025/12/4
■代表スピーチ
Mr. CHIBANA Tadashi
(ボリビアより参加)

本日、研修員を代表し、ラテンアメリカから来ました私達の心の奥から、この研修に参加させて頂いた事に感謝を申し上げます。この研修のおかげで、私達は素晴らしい和食の世界と日本の経営管理を深く理解することができました。

食材への敬意、正確さ、そして持続可能性という哲学を、一皿一皿に込められた理念として学ぶことは、私達にとって永遠に心に刻むべき事となりました。

ブラジル、コロンビア、パラグアイ、ボリビア、ドミニカ

共和国の仲間たちと共に、私達は日本への愛情と敬意を共有し、共にたくさんの食事を楽しみました。私達は、小さなラテンアメリカ的日本を形成しています。私達の友情がこの経験を忘れられないものになっています。

この機会を大切に、和食の精神と日本の企業の規律を自国に持ち帰り、私達のコミュニティと共有することをお約束します。ありがとうございました。



そば道場にて実習

新任コースリーダー 研修員と共に学ぶ

研修コース名: 地方都市におけるスタートアップ・エコシステム構築発展(A)

研修期間: 2025年8月27日～9月26日

コースリーダー 肥田 敦

8月27日午後のコースオリエンテーションから私のコースリーダーとしての研修対応がスタートしました。初めてコースリーダーを務める私が研修員と初めて直接対面する場となり、緊張と不安で一杯でしたが、インドネシア、キルギス、モザンビーク、ナイジェリア、セネガル、キューバ、パナマ、ペルーから参加した8名の研修員の期待に満ちた眼差しは、はつきりと覚えています。

このコースは、日本の地方都市における起業家育成やスタートアップエコシステム確立の取組みを習得し、これらを活用してスタートアップエコシステム形成促進施策を提案できることを狙いとし、①スタートアップエコシステムの要件の理解 ②スタートアップエコシステム形成促進施策と産官学の役割の理解 ③スタートアップエコシステムプレイヤーやスタートアップ企業の具体事例 ④アクションプランの作成 の4つの単元目標に対して40科目の講義、施設・工場見学及び討論が設定された5週間の研修となります。

私自身 緊張と不安の中でスタートした研修ですが、研修員は当初から全員が強い関心を持って前向きな姿勢で各科目の講義に臨んでくれました。また研修員同士で相互に教え合う場面も多くあり、非常に助かりました。第3週に実施した東京研修旅行は講義だけでなく、自由時間で東京を満喫できたようで大変好評でしたし、この間に企画した研修員の情報共有・意見交換のセッションによりメンバーの一体感が更に強まったように感じました。第4、5週は講義と並行してアクションプランの作成を進め、所属組織とも連絡を取りながら自分で本当に実現したいと思うプランを作ってもらいました。ア

クションプラン発表会後の研修員の笑顔は忘れることができません。

今回の研修全般を通して講師の皆さんには研修に対する熱い思いを、研修員には自組織の課題解決のために有用な情報・知見を少しでも多く習得しようという強い意志を感じました。講師の皆さんと研修員、更には両者を繋いでいただいたJICAコーディネーターの方の力がひとつになって非常に有意義な研修になったのではないかと考えています。私自身、新任コースリーダーとして研修テーマについて勉強させてもらう以上に講師の方や研修員の皆さんから本当に多くのことを学ばせてもらったと感じています。

初めての経験であり、手探りでコース運営を進めるような状況でしたが、関係者の皆様の支援を受けながらなんとか最後まで完走することができましたことを心から感謝いたします。また研修員の皆さんには今回の研修の成果を活かして自国のスタートアップエコシステム発展に尽力されることを期待しています。



COMPASS小倉訪問

＝ 閉講式 研修員代表スピーチ ＝



■閉講式

2025年9月26日

■研修受入れ期間

2025/8/27～2025/9/26

■代表スピーチ

Ms. BERNETT HERNANDEZ Gladys Nayheli
(パナマより参加)

パナマで育った私は、常に「メイド・イン・ジャパン」が日常生活の一部であると感じていました。私の学生時代はハローキティとマイメロディの学用品で一杯でした。最初のディスクマンはソニーで、ピアノはヤマハで、スクールバスはトヨタのコースターで。今でもトヨタのランドクルーザープラドを運転しています。今でも私たちはあなた方の発明品の多くを毎日使用しています。QRコードはいいですね。この小さな四角で私たちがこれほど早く目的を達成することが出来ると誰が想像したでしょう。これらのイノベーションを通じて、日本は 世界における創造性と文化の素晴らしい大使となっています。トイレのような最も基本的なアイテムでさえ、どのように変身させるかに驚嘆します。このトイレは音楽を流し、上には蛇口もあります。凄い！

私の父はよく古い格言を言っていました。「聞けば忘れ

る。見れば覚える。やってみれば理解できる。」 この5週間に日本が私たちに感じさせてくれたことを私たちは常に大切にします。母国でイノベーションエコシステムを構築する中で、私たちはテクノロジーと創造性だけでは十分ではないことを学びました。共感と信頼に基づいて構築された共通のビジョンも必要です。それは、何よりも日本が私たちに与えてくれた最大の贈り物です。また、私たちが感嘆しているのは、日本の耐力、強いアイデンティティ、そして駅で私たちを案内してくれた見知らぬ人から、路上で高齢者を助けてくれる警察官に至るまでの日本の人々の優しさです。

この忘れられない研修機会を与えてくださったJICAに心から感謝します。私たちを歓迎し、あなた方の文化を共有し、地方都市、我々の国、そして世界の未来を共創できるようにしてくれました。



JICA東京にて

■マダガスカル

帰国研修員

Ms. RAZATOVOMANITRINIARIVO Hobimalala Nadia さん



研修コース

地域の水問題を解決する
実践的統合水資源管理

研修期間

2025年7月16日～8月15日

2025年7月～8月に開催された上記研修（コースリーダー：緒方信一）に参加されたマダガスカルの Nadia さんから、近況活動についてのレポートをいただきました。

統合水資源管理の能力構築の一環として、日本で開催された専門研修プログラムに参加することで、特に洪水などの水文気象災害の予防、準備、対応に関する深い知識を身につけることが出来ました。この研修を受け、アラオトラ・マンゴロ地域の気候災害に対する脆弱性の高まりを踏まえ、洪水管理に焦点を当てた具体的なアクションプランを策定しました。

アラオトラ・マンゴロ地域は、2026年1月下旬にサイクロン・フィティア、そして2026年2月10日にサイクロン・ゲザニの連続通過によって深刻な影響を受けました。

これらの災害は大規模な洪水を引き起こし、特に水・衛生（WASH）分野のインフラや住宅に大きな被害をもたらしました。洪水は安全な飲料水や衛生サービスへのアクセスを深刻に妨げ、影響を受けた人々の健康リスクと脆弱性を高めました。

アクションプランは2025年から2026年にかけてのサイクロンシーズン中に実施し、関係者間の調整を改善し、洪水リスクへの対応力を高めることに貢献しました。



豪雨被害に伴う避難市民の様子



アンバトンドラザカ市の洪水

このアクションプランで成功裏に実施されたステップは以下の通りです。

- ・ サービスチーム、地域ディレクター、水・衛生省事務総長、並びにマダガスカルのJICAチームの間で研修成果の共有と議論を実施
- ・ 地域の水・衛生局との直接連絡やソーシャルメディアで共有された情報を通じて、アラオトラ・マンゴロ地域のサイクロンの影響を監視
- ・ アンバトンドラザカ県が主催する調整会議への参加を促進するため、メールやWhatsAppでのやり取りを通じて地域の水・衛生局へのリモート支援を提供
- ・ ユニセフ及びNGOアドラと連携し、地域における緊急水・衛生支援活動を強化するための提言
- ・ BNGRCと協力して国家緊急基金への資金申請準備に貢献
- ・ JICAマダガスカルと提携して支援申請を準備
- ・ アラオトラ・マンゴロ地域の災害後のニーズ評価文書作成への貢献



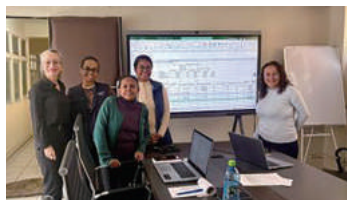
緊急対応活動のための地方自治体及び関係者による調整会議

達成された成果：

- ・ ユニセフの支援により、被災世帯向けに100個の折りたたみ式貯水容器と160本の浄水ボトルを調達
- ・ 緊急対応の強化のために、国家緊急基金（FNC）からの資金を確保し、1,200本の浄水ボトル、1,200個のバケツ、2台のモーターポンプ（付属品付き）、2個の水消毒（HTH）容器の購入
- ・ NGOアドラによる627個の貯水容器の提供による安全な水貯蔵支援
- ・ JICAマダガスカルの支援により、洪水リスクにさらされているコミュニティ向けに水・衛生（WASH）に関する2,500枚の啓発ポスターの制作

次のステップ：

- ・ アラオトラ・マンゴロ地域のサイクロンによる洪水で汚染された井戸の消毒ミッションを実施



アラオトラ・マンゴロ地域の被災者への貯水容器の配布

アラオトラ・マンゴロ地域における水・衛生セクターに関する被害・損失の評価

「バングラデシュ国大気管理能力向上プロジェクト」での訪日研修実施

技術協力部長 青柳 祐治

バングラデシュ国、特に首都ダッカは深刻な大気汚染に悩まされており、レンガ工場やセメント工場からのばいじん、道路の巻き上げ粉じんが大きな課題となっています。こうした状況を改善するため、JICAでは大気環境モニタリングや固定発生源対策の強化を支援する技術協力プロジェクトを開始し、私も行政管理能力向上の専門家として参加しています。

現地調査は大統領選挙の影響で延期となりましたが、日本の大気規制や行政の取り組みを学ぶため、先行して訪日研修を実施しました。研修生は、バングラデシュ環境・森林・気候変動省、ダッカ市、チョットグラム市で大気汚染対策を担当する皆さんです。

東京近郊での研修に続き、12月15日・16日の2日間は北九州市で研修を行いました。

初日は、北九州市環境監視課の榎原様より「北九州市における大気汚染対策の取り組み」についてお話しいた

だき、実務に基づく内容に研修生からも多くの質問が寄せられました。午後は日鉄高炉セメント様の工場を見学し、粉じん対策が大きな課題となっているバングラデシュの研修生にとって、日本の取り組みは大変参考になったようです。天候にも恵まれ、管理棟屋上から見渡したクリアな工場風景に、北九州市の良好な大気環境を実感していました。

翌日は北九州市日明工場様で排ガス測定の実験を視察し、午後には環境監視課による立入検査を見学しました。書類中心の検査内容が理解しやすいよう、私から補足説明も行いました。研修生は自分の担当分野になると特に熱心で、活発な質問が続き、大気汚染対策への強い意欲が感じられました。

また2026年5月に現地を訪問し、大気汚染の実態調査や立入検査の状況を確認したうえで、日本の経験を活かした管理能力向上セミナーを開催しました。



日鉄高炉セメント工場見学



北九州市・日明工場視察

環境省環境調査研修所の2025年度研修実績

技術協力部部長専門員 川岡 浩二、江本 寛、吉村 英俊

2015年の中央官庁地方移転により、環境省環境調査研修所の一部研修が「環境先進都市」北九州市へ移管され、KITAはその事務局として運営を担っています。

2025年度も前年度に続き、同研修所主催の「廃棄物・リサイクル専攻別研修(循環型社会実践コース)」(集合研修:2025年11月19日~21日、42名参加)と「国際環境協力基本研修」(集合研修:2026年1月28日~30日、28名参加)の2研修を実施しました。両研修は、オンラインによる事前学習と、北九州市での3日間の集合研修を組み合わせたハイブリッド形式です。

「廃棄物・リサイクル専攻別研修」では、エコタウン企業紹介を事前動画に切り替え、現場の立上げ時の経験談を盛り込んだ講義を新設。さらに、小型家電やリチウムイオン電池の適正回収・処理の見学、業界が抱える課題と自治体への要望を共有する時間を確保するなど、実務に直結する内容へと改善しました。また、一部動画講

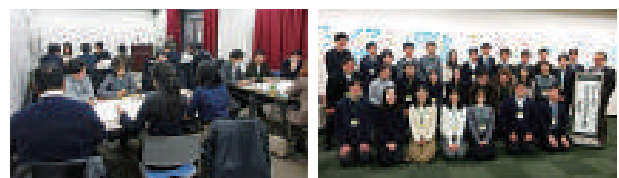
義にはAI音声(VOICEBOX)を初めて導入しました。

「国際環境協力基本研修」では、これまで事前動画で行っていた環境省の基調講義を集合研修初日に対面で行った。加えて、研修修了生で国際協力の実務に携わる自治体職員を講師に迎え、実践的な事例紹介を行うなど、新たな試みを取り入れました。また、集合研修では、講義・施設・企業見学、グループ討議、国際環境協力の実務経験者や海外留学生とのディスカッションなど、多様なプログラムを展開。いずれも研修生アンケートで約80%超が高評価(5段階評価の4・5)を占め、対面ならではの交流や相互啓発、アフター5の懇談を通じたネットワーク形成も大変好評でした。

2025年度の成果を踏まえ、今後も研修内容のさらなる充実と、自治体職員の実務力向上に資するプログラムづくりを進めていきます。



廃棄物・リサイクル専攻別研修:企業見学(展示スペース)、閉講式後の集合写真



国際環境協力基本研修:グループ討議の様子、閉講式後の集合写真

「北九州メンテナンス技術研究会(KME)」の活動紹介

KME事務局 佐藤 久美

【トピックス】KME技術セミナーはリモート＆対面併用の講義を採用していますので、北九州市から離れた全国からの受講が可能です。また会員外の方の受講も受付けておりますので、広く設備保全技術者の育成にご活用下さい。

KMEは北九州市近郊の35社を会員に、セミナーや部会活動などを通じて、各社の設備保全技術者の育成・交流を図っています。コロナ禍を経て、2021年度から、リモート＆対面講義併用方式を導入しております。講師陣は、大学教授や現場実務に精通したエンジニアなど多彩なメンバーをそろえており、多くの実例や実施例を紹介することで、大変好評を得ております。

9テーマのセミナーで、年間延べ100～140名と多くの受講者に参加いただいております。リモート講義の良い点として、コロナ禍対

策に加え、移動時間の節約や、県外からの受講が可能であるなど好評であり、2022年度以降も同方式を採用しております。2025年度も、千葉県、愛知県、山口県、大分県など県外からの多くの参加者を得ています。

今後も県外からの受講可能性をひろげるため、会員会社の他府県支店等への展開を行います。さらに広く会員外からの受講希望を募るため、HP掲載等により、受講者増の活動につなげていく所存です。

KMEセミナー 2026年度 活動計画

セミナー名	指導講師	開催月/日数
疲労・強度	九州大学 教授 後藤 浩二	5月/2日間
腐食・防食	日鉄住金環境 (株) 近藤 純平	6月/1日間
溶接技術	安西溶接技術コンサル・技術士事務所 安西 敏雄	7・8月/3日間
トライボロジー	元日本製鉄 四阿 佳昭	9月/2日間
設備診断技術 (電気編)	工学博士 植山 高次	10月/2日間
油圧技術	元日本製鉄 森 章	11月/2日間
制御技術 ※	(株) 安川電機 担当講師	12月/1.5日間
設備診断技術 (機械編)	情報工学博士 前川 健二	1月/3日間
表面改質技術	日鉄ハードフェイシング 担当講師 吉川工業 (株) 担当講師	2月/2日間

※ 制御技術セミナーは実習を伴うため、対面方式にて実施します。

リモート講義、対面式講義(直接参加)併用方式のイメージ図



お疲れさまでした!

定年退職された皆様からメッセージ

在籍期間 2018年8月～2026年3月



中村 博
コースリーダー

8年間、KITAの皆様にお世話になりました。発電と電力システムの研修コースを担当し、最後は和食ビジネス振興コースを担当しました。具体的なテーマは高効率火力発電、太陽光発電の導入、再エネ大量導入時の電力システムの安定化、和食ビジネス振興でした。視察先に協力して頂いたお陰で、新たに小学校の太陽光発電や電力会社の新しい設備、変圧器の製造会社を訪問する事ができました。新しい視察先の開拓には、相当な事前準備と調整が必要でしたが、今では楽しい思い出です。研修員のそれぞれの国の電力事情を知る事ができ、研修員と共に、講師や視察先から、新たな知識を学ぶ事が出来ました。一方、和食ビジネス振興では、研修員と和食を食べ歩きました。コロナパンデミック期間中の2年間は、夜間の遠隔研修しか出来ずに、講師の皆様にもご苦労をお掛けしました。KITA、JICA、講師の皆様、視察を受け入れて頂いた皆様のお陰で、楽しい8年間を過ごす事ができました。本当に、ありがとうございました。

河口湖畔の紅葉 (2024年度 再生可能エネルギー導入計画コース)



楽しい会食
(2025年度 廃棄物の適正処理技術コース)

在籍期間 2013年2月～2026年3月



指輪 勤
コースリーダー

2004年から2010年まで国際村交流センター2階のKITA環境協力センターに出向し、その後2013年からKITA研修部でお世話になりました。以前の会社勤務では主に海外プロジェクトのF/Sに従事して、インド・中国・ベトナムにも計7年間駐在していました。KITAでは会社時代とは違い、研修員とは利害関係がないので気遣いなしで話せること、またパレスチナや南スーダンなど政情不安な国からの研修員とも人と人の関係として向き会え、良い経験になりました。個人的には研修期間中の約2ヶ月間は英語だけの会話や書面での対応となり、貴重な時間を過ごせました。また英語で話す事で曖昧だった自分の考えを明確にできたとも感じます。日本語を英訳するに際し、私の英語レベルだと自然に言葉が出るのではなく一呼吸考えて発するのですが、そこで感じるのは日本語では特有の曖昧さで通じるためか、英語への変換で如何に考えを纏めていなかったかを思い知ったことです。勿論、語彙力や表現力の低さも原因でしょうが、自分の思考回路が曖昧だったことに気づいた次第です。ほなあさいなら! おおきに!

KITA人事異動 (2025年7月1日～2026年6月30日)

退任

技術協力部 KME事務局…森 章 (2026年 3月31日付)	事務局調整課……………新原 幸子 (2026年 3月31日付)
研修部コースリーダー……指輪 勤 (2026年 3月31日付)	事務局事務課……………関 奈月 (2026年 3月31日付)
研修部コースリーダー……中村 博 (2026年 3月31日付)	

新任

技術協力部 部長専門員…吉村 英俊 (2025年10月 1日付)	技術協力部 KME事務局…佐藤 久美 (2026年 1月 5日付)
----------------------------------	-----------------------------------

KITAニュース

No.61 (第61号)

2026年7月発行

発行:公益財団法人北九州国際技術協力協会

編集発行人:事務局長 小田原 博

〒805-0062 北九州市八幡東区平野一丁目1番1号 国際村交流センター4階

TEL 093-662-7171

FAX 093-662-7177

E-mail info@kita.or.jp

●右記Web site (KITAホームページ) には、KITAのご案内、活動、過去のKITAニュースなどを掲載していますのでご覧下さい。

<http://www.kita.or.jp/>

KITA

